

F-41 予報 早期胃癌についての世論調査 —対がん活動の側面的一助—
中村学園大家政 山下敬子

目的 本報は前報に引続き胃癌死防止を目的としている。胃癌は初期に発見して直ちに胃の切除手術を施せば大半が全治する。胃癌を早期に発見する唯一の方法は、人々が胃癌についての関心をもち、少くとも1年に1回は必ず胃の定期検診を受けることが必要条件である。患者はたうく胃癌死から逃れ得た、この尊い体験を公開し、胃癌死防止の目的に、人々を啓蒙するに先立ち早期胃癌に対する認識の程度を把握することを目的とする。本実態調査の一連の報告は、いずれも現在がん征圧にたづさわってあらはる関係各位に資料を提供して一日も早く強力な施策の実施を併せて目的とするものである。

方法 本学学生の父か母いずれか1人、またはこれに代る人576人を対象として、アンケート紙法で調査した。調査時期は1973年5月1日～14日であり、回収率は82.6%であった。有意差の検出は χ^2 検定によるで行なった。

結果 1)胃癌の初期は自覚症状がないことを知っていたものは85.3%、知らないものは13.0%であった。2)40歳以上の人の胃の定期検診の率が高い回数を、1年に2回と答えたものは43.9%、1年1回と答えたものは41.2%であった。3)92.0%のものが胃癌の原因はまだ「解明されないと答えた。4)早期胃癌で全治が確約される場合、医師から病名を知らせてほしいと答えたものは男子で75.6%、女子で90.4%であった ($P < 0.01$)。全体では84.0%のものは病名を知ることを選んでいた。